

『ロシア・アカデミー辞典』
«Словарь Академии российской»
ч. 1-6, СПб. 1789-1794.¹

「勿論のこと、申し訳なく思うのは、さなきだに、拙い私の文の綾、そうでなければ今更に、異国の言葉を鑲める こともさらさら あるまいものを。この私めとて その往古、翰林院の辞典をば 覗いた事も ありましたのに。」

拙訳で恐縮であるが、プーシキンは「オネーギン」の中でこのように書いている。ロシア最初の本格的辞典としてのアカデミー辞典の文化的意義の大きさを窺える一節である。

勿論それまでロシアに辞典がない訳ではなかった。1596年には最初の印刷されたジザニイの辞典(1061語)があった。パンヴァ・ベルインダの「スラヴ・ロシア語辞典」の初版の発行は1627年、第2版は1653年であった。発行地はキエフであったからここでいうロシア語とは、実際にはウクライナ語のことである。また1771年にはグリテルゴフの辞典「ルスキエ・ツェラリウスィ」が、1773-76年には、モスクワ・アルハンゲリ寺院の主教アレクセーエフの「教会語辞典」が、それぞれ出版された。

ロシア文学語の辞典を要求する機運は、このような経過の上に醸成されて来る。その最初の契機となったのは、トレヂアコフスキーであった。彼は1735年創立のアカデミー・ロシア部会において、同年「ロシア語の純粋性に関する演説」を行い、ロシア語の文法、修辞と並んで詳解辞典の必要を訴えた。会員アンドレイ・ボグダノフが中心となり、字母順に約6万語を収録した辞典を作ったのも、また同じく会員のタウベルトが他の会員の協力を得てPの項までの辞典を作成したのも、これに呼応したものであった。ロモノソフの協力者コンドラートヴィチも、ロモノソフと共に辞典編纂の作業を行った。これらは何れも手稿のままに終わったが、その成果は有形無形にその後の辞典編纂に影響を与えた。

このような状況の下で、ロシア・アカデミーはロシア語詳解辞典の編纂を決定した。1783年のことである。

この辞典について語るためには、まずロシア人による最初のロシア文法を書いた、ロモノソフに触れない訳にはいかない²。彼は実は物理学、化学、地質学等を修めた一世の碩学である。サクソニアに遊学の折、彼は多くの方言の上に、一国の文化を担う統一した言語の存在するのを知った。これに対して祖国ロシアには、一方では教会スラヴ語の優越的地位の弱化に伴う、民衆語及び官庁用語との相互関係の不明確化、他方では諸方言の上に立つ共通語の未形成という状況があった。トレヂアコフスキーの呼びかけに応じ「ロシア

¹『窓』別冊 1980年3月5日 12-13頁。

²補足参照。

文法」を著わしたのも、ひとえにこの混沌を整理し、ロシア語を文化の担い手に相応しいものにしたいという、愛国的至情の結果であった。勢い彼の文法は、当時の言語状況の透徹した分析に基づくものでありながら、他面強い規範性をもたない訳にはいかなかった。他方教会スラヴ語、民衆語などの要素の位置を明確ならしめるために、修辞、即ち文体の区別を明確にする必要もあった。中世以来の伝統に立脚しつつ、ロシアにおける文体の理論を構築しようとした、ロモノソフの三文体説はこうにして成ったのである。

しかし言語の規範化は規範文法の編纂だけで成就するものではない。規範の典拠となる辞典が必要である。アカデミーの辞典こそはこのような役割を担うものでなければならなかった。責任者のレピョーヒンの外、フォンヴィジン、クニャジニン、ボグダノヴィチ、デルジャヴィン等当時の文壇の巨星や一流の学者がこの編纂に参加しているのも、故のないことではない。この辞典はロシア言語文化史上の一大事件であった。

この辞典は1789-94年に全6巻が刊行され、収録語数43257である。個々の語には文法的指示の外、文体的標識がつけられていること、引用の実に10分の9がロモノソフの著作からであることなどは、既に述べた事からむしろ当然である。この辞書は語根を見出しにし、派生語をすべて追込むという「派生語的」辞典であって、使用に甚だ不便であった。為に1801年から若干の語彙の修正と、動詞の見出しを古典語と同じ1人称単数形から不定形に変えるなどして成った『字母順ロシア・アカデミー辞典』の刊行が始められた。収録語数51388。現在入手できるリプリント版はこの後者である。

この辞典には、トレジアコフスキーの国粹的傾向（純粋性）が一定の反映をみせている。たとえば *Теорія, астрономія, библиотека, анатомикъ* などの外来語に対して、それぞれ本来語の *умозрѣніе, звездословіе, книгохранилище, трудоразъятель* があてられていることにみられる通りである。冒頭のプーシキンの「弁明」も、このような背景に基づいている。内容について語ることもなお多いが、紙数も既に尽きた。当時の言語文化のパノラマであると評して割愛する外はない。

〔補足〕

近年ウスペンスキーが彼自身の発見にかかるイヴァン・セルデュコフのものとされる、1738年の日付のある講義ノートの断片を研究し、これがアドドゥーロフの講義ノートと推察される事、またその内容が1750年にストックホルムにおいて出版された、グレーニングのスウェーデン語による文法の内容と酷似している事から、グレーニングの文法はアドドゥーロフ自身の講義ノートからのスウェーデン語訳である事を主張している。アドドゥーロフはエカテリーナ2世にロシア語を教えていたとされているが、もしウスペンスキーの説が正しいという事になれば、ロシア人による最初のロシア文法を書いたのは、ロモノソフではなく、アドドゥーロフであるという事になる。これについてはなお研究が必要であろうが、信憑性はかなり高いように見受けられる。これについての若干の説明は、

拙著『ロシア中世文法史』、名古屋大学出版会、1991年を参照されたい。これにはグレーニングの文法の全訳が付録として添付されている。

ウスペンスキーの論文は Успенский, Б. А., *Первая русская грамматика на родном языке*, М. 1975. である。